

中国人日本語学習者の人を表す接尾辞の派生語習得に 影響する要因

大和祐子（大阪大学）・玉岡賀津雄（名古屋大学）・初相娟（天津外国語大学）

要 旨

中国人日本語学習者200名を対象に、日本語の人を表す接尾辞を付加した派生語の理解における影響要因を検討した。要因としては、(1) 派生語が日中同形であるかどうか、(2) 「人」「者」「員」「家」の4種類の接尾辞、(3) 語基の難易度、(4) 読解能力の4つの要因を設定した。以上の4つの要因で、派生語の正誤の回答を予測する決定木（その中の分類木）分析を行った。その結果、中国語に同形語があるかどうかが強に影響した。そして、同形語がある場合には、語基の難易度が正誤の判断に影響を与えた。一方、中国語に同形語がない場合には、接尾辞の種類が影響した。日本語の読解能力は、同形語の無い「者」を付加した派生語の理解に影響するだけで、極めて限定的な要因であった。

【キーワード】：接尾辞 派生語 日中同形語 中国人日本語学習者 決定木分析

1. 研究目的

派生語とは、本来独立した1つの単語であったものが、接辞などが付いて別の一語となったものである。漢語は造語力が強く（沖森・木村・田中・陳・前田、2011）、漢語に接辞を付加させ、多くの派生語を作ることが可能である。そのため、派生語を正しく理解・運用できるようになることは、日本語学習者が日本語の語彙を効率的に増やし、表現を豊かにする上で重要である。

日本語は、中国語から漢字を借用して文字として使用している。日中両言語で共有している漢語も少なくない。つまり、両言語では視覚的に漢字を介して、音に依存しないで意味を理解することが可能である。そのため、中国人日本語学習者にとって、日本語の漢語の理解は他の日本語学習者と比較しても容易であることが報告されている（加藤、2005; 大和・玉岡、2013）。そうであれば、漢語を語基として接辞を付加させることの多い日本語の派生語の理解にも、中国人日本語学習者の漢字知識が有利に働くのではないだろうか。

日中両言語で共有する語が多く存在する一方で、両言語で使われる漢字の意味や用法には微妙な違いがある。そのため、中国人日本語学習者が母語の漢字知識を援用しようとする、誤用が引き起こされることもある（三喜田、2000）。実際、中国人日本語学習者の作文には「*私は将来考古学家になりたいです。」のような誤用も見られ

る（河住、2005）。日本語では考古学の専門家を「考古学者」といい、接尾辞「者」を用いる。しかし、中国語ではこれに対応する語は「考古学家」であり、接尾辞「家」を用いる。同様に、日本語では「者」を使って「科学者」と表現するが、中国語では「家」を使って「科学家」と表現する。これらの派生語では、両言語で使用される接尾辞が異なっている（三喜田、2000）。そのため、中国語での接尾辞の知識が、弊害となる場合もある。そこで、本研究では、日本語の人を表す接尾辞を付加した派生語に焦点を当て、派生語に関連した刺激特性および中国人日本語学習者の特性が、派生語の習得に及ぼす影響を明らかにする。

2. 人を表す接尾辞を付加する派生語

人に関係した「語＋接尾辞」の形式では、「事務員」や「漫画家」など派生語が中国語と日本語の両言語で使われる。人を表す接尾辞も、日中両言語で共通しているものが多数存在する。そのうち、日中両言語で使用されている接尾辞であること、かつ多くの語基と接続する可能性があること、日本語と中国語で接尾辞が持つ意味が微妙にずれていることを条件に接尾辞を選定し、本研究では「人」「員」「者」「家」の4種類の接尾辞を対象とした。「人」「員」「者」「家」は、語基となる語によって同じ接尾辞を使用する場合と、そうでない場合がある。例えば、組織やグループを代表する人のことを日本語では「代表者」と接尾辞「者」を用いるが、中国語では「代表人」と接尾辞「人」を用いる。このように日本語で接尾辞「者」を用いる場合には中国語では接尾辞「人」が用いられることが多い（唐、2009）など日中両言語の接尾辞の対応関係を指摘するものもあるが、それには例外も多く、「審査員」のように日本語では派生語となる語であっても、中国語では「審査人員」と、そもそも派生語で表現できない場合も多い。これらのことを考えると、両言語の接尾辞に明確な対応関係があるとは言いがたい。

以上の4種類のいずれかの接尾辞を取ることができる語を本研究における刺激語として32語選定した。なお、日本語で「支配者」「支配人」のように意味は異なるが「者」と「人」を共に接尾辞として取ることができるような派生語は、本研究では対象外とした。また、日本語の接尾辞「者」のように、語基によって「しゃ」「もの」など読み方が複数あるものもあるが、漢字の接尾辞の研究として位置付けているので、特に区別していない。本研究では、刺激語32語の語基を提示し、付加することができる接尾辞を「人」「員」「者」「家」の4種類から選択するという多肢選択式のテストによって正誤を測った。例えば、「田舎（ ）」であれば、「人 者 員 家」から1つを選ぶという形で出題した。この設問の正解は「者」である。なお、テストでは文脈からの推測による影響を排除するため、刺激語の語基のみを提示した。

各接尾辞を取る刺激語を8語ずつ選定した。そのうち4語は語基が難しいもの、残りの4語は語基が易しいものとした。語基の難易度の判定には、国際交流基金・日本

国際教育協会（2002）の旧日本語能力試験の配当級を参照した。「難しい」語は旧1・2級に相当する語、「易しい」語は旧3・4級に相当する語とした。これにより語基となっている語の難易度の影響を考察する。本研究で対象とする中国人日本語学習者にとって、日本語と中国語で共有する漢字や語が多いため、日本語の語基の難易度の影響は弱いかもしれない。しかし、日本語を外国語として学習するという観点から考えると、語基は語彙知識として位置付けられるので、語基の難易度が正しい接尾辞の選択の要因の1つとなる可能性があると考えられる。

さらに各派生語の中国語の同形語の有無の判断は、中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編集（2005）の『現代漢語詞典』（第5版）に基づいて確認した。

3. 人を表す接尾辞の派生語習得に影響が予想される要因

中国人日本語学習者の人を表す接尾辞の派生語習得には、様々な要因が影響していると予想される。影響が予想される要因のうち、どの要因が最も強く影響するのか。また、どのような要因が中国人日本語学習者の派生語習得には影響しないのか。さらに、その影響の中には母語である中国語からの「正の転移」と呼べるものと「負の転移」と呼べるもの両方が存在すると考えられる。これらを明らかにするためには、中国人日本語学習者の派生語習得に影響すると考え得る要因を設定し、それらを同率に比較することによって、影響の強さを総括的に判断する必要がある。そこで、本研究では中国人日本語学習者の日本語における派生語の習得に影響する要因を明らかにするために、影響が予想される要因として、次の3つの刺激特性および1つの被験者特性の合計4つの要因を設定した。以下に、それぞれの要因について記述する。

第1の要因は、中国語である母語と学習対象の言語である日本語との派生語の類似性である。ここでは、日中両言語での同形語の有無を要因とする。人に関係した派生語は、漢字で表記される語であり、母語で漢字を使用している中国人日本語学習者には習得しやすいと考えられる。しかし、接尾辞の使い方が両言語で異なる場合には、中国語の知識が逆に弊害になる可能性もあり、日本語で人を表す接尾辞の習得について検討する場合に、母語の影響が無視できない。したがって、本研究では、接尾辞を付加した派生語が日本語と中国語で同形であるかどうかを要因として設定した。ただし、各接尾辞の読みの類似性は問題としない。

第2の要因は、接尾辞の種類である。杉村（1986）は、日本語と中国語のそれぞれの接尾辞の「者」と「家」を比較して、日本語と中国語ではそれぞれの接尾辞が表す範疇が異なることを指摘しているが、日中両言語で、接尾辞の使用における意味的範疇が異なるのであれば、それが日本語の人に関係した派生語の習得のしやすさにも影響してくると予想される。そこで、本研究では「人」、「員」、「者」、「家」の4つの接尾辞を同時に検討することで、接尾辞の種類の影響を明らかにする。

第3の要因は、派生語の語基の難易度である。実際、中国人日本語学習者を対象と

して、日本語の漢字二字熟語の処理を調べた大和・玉岡（2009）では、母語と書字形態を同じくする日本語の漢字表記語も、使用頻度や難易度が正誤判断の正確さに影響することを示している。そこで、派生語の語基の難易度を区別し、要因として設定した。第4の要因は、中国人日本語学習者の総合的な日本語能力の特性である。

以上のように、本研究では、派生語の理解への影響関係を検討するために、32語の派生語を対象とし、(1) 日中両言語における同形語の有無、(2) 接尾辞の種類、(3) 語基の難易度、(4) 学習者の日本語習熟度、の4つの要因を設定した。具体的な調査語は、表1に示した通りである。

4. 調査対象者

200名の中国人日本語学習者が、本研究の調査に参加した。その内訳は、1年生が43名、2年生が78名、3年生が79名であり、性別では、男性は52名、女性は148名であった。全員が、中国国内の大学で日本語を専攻しており、全体の平均年齢は21歳0ヶ月で、標準偏差は1歳8ヶ月であった。

5. 読解テスト

本研究では、被験者要因として調査対象者の総合的な日本語の習熟度を測るため、調査に先立って読解テストを実施した。読解には、日本語の語彙知識や文法知識が必要不可欠であることが知られている。日本語学習者がテキストを理解するにはテキストに含まれる語の約96%の語彙知識が必要であり（小森・三國・近藤、2004）、日本語学習者がテキストを読む過程で語彙知識および文法知識を駆使することにより効率的な読みを実現させている（大和・玉岡・初、2013）ことが分かっている。そのため、本研究では読解能力を測ることにより、総合的な日本語の習熟度を測ることができると判断した。

読解テストで用いられたテキストは200文字から800文字までの比較的短い文章であり、含まれる語は旧日本語能力試験2級を目安とし、難しい語には必要に応じて注釈をつけた。人文系2題・社会系1題・自然系1題の4つのテキストからなり、1つのテキストにつき4問の問いが設定されており、1問1点で合計16問の16点満点であった。クロンバックの信頼度係数は、 $\alpha = .64$ であり、問題数が少ないことを考慮すると比較的高い信頼性であるといえよう。読解テストの結果は平均値が10.79点、標準偏差は2.79点であった。読解テストの点数により群分けを行い、13点以上を上位群（61名）、10点から12点を中位群（70名）、9点以下を下位群（69名）とし、3群に分けた。以上の方法で測った学習者の総合的な日本語の習熟度を派生語の習得に及ぼす要因の1つとして設定した。

表1 人を表す接尾辞を持つ派生語の特性および刺激語別・習熟度別の正答率

刺激語	語基		中国語訳	同形語の有無	正答率		
	難易	出題級			上位群	中位群	下位群
外国人 有名社会 世話代理 保証 商売 旅	易	4	外国人	有	100.00%	97.14%	94.20%
		4	名人	無	75.41%	62.86%	47.83%
		3	社会人	有	86.89%	80.00%	71.01%
		3	发起人	無	49.18%	55.71%	56.52%
	難	2	代理人	有	90.16%	77.14%	86.96%
		2	保证人	有	81.97%	74.29%	71.01%
		2	商人	無	42.62%	35.71%	55.07%
		2	旅客	無	77.05%	62.86%	60.87%
会社 銀行 駅 会 警備 事務 審査 従業	易	4	公司职员	無	81.97%	81.43%	84.06%
		4	银行职员	無	52.46%	38.57%	23.19%
		4	车站工作人员	無	88.52%	81.43%	79.71%
		3	会员	有	93.44%	88.57%	81.16%
	難	2	保安	無	90.16%	82.86%	76.81%
		2	事务员	有	86.89%	88.57%	63.77%
		1	审查人员	無	77.05%	72.86%	55.07%
		1	从业人员	無	67.21%	67.14%	62.32%
経験 科学 田舎 邪魔 司会 労働 実力 消費	易	3	有经验的人	無	85.25%	85.71%	86.96%
		3	科学家	無	40.98%	45.71%	31.88%
		3	乡下人	無	31.15%	54.29%	60.87%
		3	捣乱的人	無	81.97%	77.14%	71.01%
	難	2	主持人	無	70.49%	67.14%	52.17%
		2	劳动者	有	96.72%	94.29%	91.30%
		2	具有实力的人	無	65.57%	61.43%	60.87%
		2	消费者	有	96.72%	100.00%	95.65%
勉強 写真 漫画 政治 読書 評論 努力 活動	易	4	勤奋用功的人	無	50.82%	37.14%	20.29%
		4	摄影师	無	72.13%	48.57%	33.33%
		3	漫画家	有	95.08%	98.57%	89.86%
		3	政治家	有	98.36%	95.71%	94.20%
	難	2	喜欢看书的人	無	21.31%	10.00%	0.00%
		2	评论家	有	85.25%	85.71%	81.16%
		2	努力的人	無	39.34%	21.43%	11.59%
		2	活动家	有	40.98%	42.86%	36.23%

6. 分析の結果

6. 1. データの記述

人を表す接尾辞を含む派生語の理解テストの全調査対象者200名の平均正答率は67.23%であった。表1に各刺激語の読解で測定した日本語習熟度の上位・中位・下位群別の正答者数、誤答者数および正答率を示した。32語の派生語のうち、項目別の正答率が最も高かったのは日中同形語で、2級配当語で難しい語基を持つ「消費者」で、97.50%であった。一方、項目別の正答率が最も低かったのは、日中同形語ではなく、

語基が2級配当語で難しい「読書家」で、ちょうど10%であった。「家」の使い方が日中で異なるのが原因ではないかと推測される。接尾辞別に比較すると、「者」の平均正答率は73.31%、「員」の平均正答率は71.16%、接尾辞「人」の平均正答率は70.31%で近似しているが、「家」の平均正答率は54.25%であり、4つの接尾辞の中では最も低い。ただし、同じ接尾辞が付加される語であっても、正答率に差が見られたものもあり、必ずしも特定の接尾辞が付加される語の正答率が高いとは言えない。例えば、接尾辞「員」を取る語の場合、「警備員」（同形語なし、難しい語基）の正答率は83.00%であるのに対し、「銀行員」（同形語なし、易しい語基）の正答率は37.50%と両者の正答率には大きな差がある。さらに、各語の正答率をみると、語基が難しい語が必ずしも正答率が低く、語基が易しい語が必ずしも正答率が高いとは言えないことも分かる。したがって、本研究では、複数の変数の影響を同時に検討できる決定木分析（decision tree analysis）と呼ばれる多変量解析を使った。

6. 2. 決定木分析

決定木分析は、複数の説明変数（あるいは独立変数）で、質的データの目的変数（あるいは従属変数）を予測する分析である。複数の変数に基づき、階層別の組み合わせによってモデルを構成し、その結果を木の枝葉のように描いてくれるので、樹形モデルとも言われる。この分析方法では、階層的・総括的に考察することができ、すべての変数を（影響の可能性がある諸要因を含め）同時に分析できることから、複数の要因がかかわっていると考えられる本研究のようなデータに有効な分析方法と考えられる。なお、本研究では、決定木分析の内、分類の有意性がカイ二乗値で判定される分類木分析（classification tree analysis）を使用した。この種の研究としては、共起頻度のコーパス研究に応用した玉岡（2006）、複合動詞の習得の要因を検討した玉岡・初（2013）がある。なお、説明変数とした変数はすべて同率に扱われ、樹形図に現れなかった変数は、有意な予測変数ではないことを示す。また、決定木分析は、有意な変数のみが樹形図に描かれ、上位にくる要因ほど影響力が強い要因であることを示す。本研究では、(1) 日本語と中国語における同形語の有無、(2) 人を表す接尾辞の種類（「人」「者」「員」「家」）、(3) 語基の難易度（難しい語基・易しい語基）、(4) 学習者の習熟度（読解能力の点数による上・中・下位群）の4つの独立（説明）変数で、人を表す接尾辞の派生語の正誤を予測する決定木分析を行った。決定木分析の相対リスクは27.73%で、標準誤差は0.56%であった。つまり、本変数によって72.27%を正しく予測できるという結果であった¹⁾。人を表す接尾辞の派生語の正誤判断には、まず中国語の同形語の有無が非常に強く影響した。さらに、中国語における同形語の有無で2つに分かれ [$\chi^2(1) = 494.84, p < .001$]、中国語に同形語がある語（ノード1）の正答率は84.08%で、中国語に同形語がない語（ノード2）の正答率は57.12%であり、大きな差が見られた。派生語が日本語と中国語で同形であるかどうか強い要因となってい

たので、同形語の有無別に結果を説明する。

6. 2. 1. 派生語が日中同形である場合

派生語が日中同形である場合、決定木分析では語基の難易が正誤の回答に影響した。正答率は、語基が易しい語（ノード3; 90.80%）の方が、語基が難しい語（ノード4; 79.29%）より有意に高かった [$\chi^2(1) = 57.79, p < .001$]。さらに、語基が易しい場合は、接尾辞が「家」の場合（95.25%）と「人」または「員」の場合（87.83%）で2つのノードに分かれた [$\chi^2(1) = 15.80, p < .001$]。語基が難しい語の場合（ノード11～13）は、さらに3つのノードに分かれた [$\chi^2(2) = 138.90, p < .001$]。ノード11～13によると、接尾辞が「者」（ノード11; 95.75%）である場合が最も正答率が高く、次に「人」または「員」（ノード12; 79.83%）で、「家」（ノード13; 62.00%）が最も正答率が低かった。つまり、中国語に同形語がある派生語の場合、まず語基の難易が接尾辞の選択の正確さに影響し、次に接尾辞の種類が影響することが分かった。

6. 2. 2. 派生語が日中同形でない場合

派生語が日中同形でない場合については、接尾辞の種類によって、図1のように4つのノードに分かれた [$\chi^2(3) = 327.91, p < .001$]。接尾辞が「員」（ノード5; 69.92%）である場合が最も正答率が高く、次に「者」（ノード6; 62.83%）である場合、第3に「人」（ノード7; 56.62%）である場合で、最も正答率が低かったのが「家」（ノード8; 29.88%）であった。4つの接尾辞のうち、最も正答率が高かった接尾辞「員」の場合には、日本語の習熟度により、さらに2つのノードに分かれた（ノード14と15）。日本語能力上位群および中位群の正答率（73.28%）が下位群の正答率（63.53%）より有意に高かった [$\chi^2(1) = 12.27, p < .001$]。一方、4つの接尾辞のうち極端に正答率が低かった接尾辞「家」については、ノード16と17から分かるように、語基が易しい場合（43.00%）は語基が難しい場合（16.75%）より有意に正答率が高かった。これらの結果から、日中同形語でない場合には、まず接尾辞の種類が派生語の接尾辞選択に影響し、そのうち正答率が高い「員」では日本語習熟度の違いが、正答率が低い「家」では語基の難易度がそれぞれ影響した。

7. 総合考察

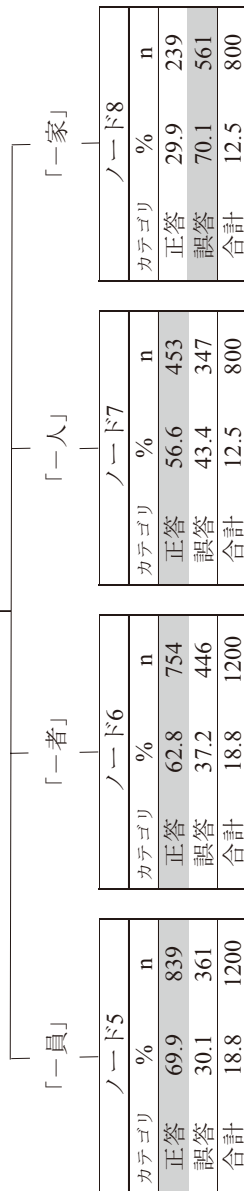
本研究では、中国人日本語学習者の人を表す接尾辞を付加した派生語の習得に影響する諸要因を階層的・総括的に検討した結果、母語の影響が最も強くみられることが明らかになった。決定木分析の結果によると、中国人日本語学習者にとって接尾辞を付加した派生語の正誤判断に強く影響するのは、派生語が日中同形語であるかどうかであった。本研究で扱った派生語に限らず、日中同形語は多数存在し、日中言語間で70%余りが同形語である（陳、2002）こと、また語基の難しい語であっても同形語であれば正答率が高かったことを考えると、本研究を通して、中国人日本語学習者にとって派生語の接尾辞を選択するとき、多くの場合、母語の知識が有利に働いている

中国語における同形語なし

ノード2		
カテゴリ	%	n
正答	57.1	2285
誤答	42.9	1715
合計	62.5	4000

接尾辞の種類

$\chi^2(3)=338.761, p<.001.$



日本語の習熟度

$\chi^2(1)=12.271, p<.001.$



語基の難易度

$\chi^2(1)=65.782, p<.001.$

図1 中国語に同形語がない日本語の人を表す接尾辞の派生語理解に影響する諸要因

注 この図は、決定木分析の一部を示したもので、ノード2から伸びた樹形図を示したものである。

ことが確認された。ただし、先行研究（三喜田、2000; 河住、2005）でも指摘されているように、派生語が日中同形語でない場合は、母語の知識が有利に働くとは言えない。事実、日中同形語ではない派生語に対し、中国語と同じ接尾辞を付加するという誤用も見られた。例えば、本研究の刺激語の1つである「科学者」（同形語なし、易しい語基）は、母語の知識による弊害が見られた典型的な例である。中国語で「科学家」と表記する「科学者」の場合、「科学者」の正答率は、39.80%であったのに対し、「*科学者」を選択したのは56.22%であった。つまり、正答よりも母語と同じ接尾辞「家」を付加させた派生語「*科学者」を選択した学習者が多かった。同じく「銀行員」（同形語なし、易しい語基）の正答率が37.50%であるのに対し、誤答である「*銀行家」を選択した中国人日本語学習者が56.22%であった。「*銀行家」の場合、中国語で「銀行家」と表記しない点が「*科学者」の場合とは異なる。これは、中国語における「家」が示す意味は、「ある種の職業に従事する人、ある種の専門知識を身につけた人」であることから、「銀行での職に従事する人」と考え、多くの中国人日本語学習者が「*銀行家」を選択したと考えられる。この結果は、中国人日本語学習者が単純に同形語かというだけでなく、中国語における各接尾辞が持つ意味の知識を日本語の接尾辞選択に援用させていることを示している。一方、日本語では接尾辞「家」を付加させるべき語でも、「ある種の専門知識を身につけた人」という意味を持たない語は「家」を選びにくい傾向にあった。事実、本研究で扱った4種類の接尾辞の中で最も正答率が低かったのは「家」であり、他の接尾辞を取る語より正答率が有意に低かった。とりわけ、日中同形語ではない接尾辞「家」を取る語は正答率が著しく低く、その中でも語基が難しい語（16.75%）は易しい語（43.00%）より正答率が有意に低かった。ここに含まれる「読書家」、「努力家」、「勉強家」、「写真家」を意味の観点から見ると、そのうち「読書家」、「努力家」、「勉強家」は「<語基で表される行為>を積極的に行う人」という意味になる。これは、人を表す接尾辞を含む派生語の中でも、特殊な意味合いを持つ。このような「家」の使われ方は、中国語においても「美食家」など少数であるが存在するという（杉村、1986）が、この種の語の正答率の低さを見る限り、このような意味での「家」には、とりわけ馴染みがなかったと考えられる。また、日本語の習熟度が高い上位群であっても、「努力家」の正答率が39.34%であったことなどから推測するに、これらの語彙の接尾辞を正確に選択することは習熟度にかかわらず非常に難しかったことが分かる。

接尾辞「家」のみならず、他の接尾辞の結果からも日中両言語の持つ接尾辞の意味の近さが正しい接尾辞を選択するのに影響していることが分かる。特に、それは中国語に同形語がない場合で顕著であった。例えば、「警備員」（同形語なし、難しい語基）は中国語で「保安」と表現し、人を表す接尾辞を含む派生語の形では対応する語がないが、全調査対象者の平均正答率は83.00%と同形語がある派生語と比較しても高い。中国語で接尾辞「員」は「職業でそれをしている人」という意味を持つ。そのため、

中国語では通常接尾辞をとらない語であっても、中国語の接尾辞の知識を援用し、語基「警備」に「員」を付加させればいいと考えた学習者が多かったのではないだろうか。日本語の接尾辞「員」も、中国語の接尾辞「員」と意味的に近いため、中国人日本語学習者は中国語の接尾辞の意味の知識を援用して、日本語でも正しい接尾辞を選択できた可能性が高い。

以上のように、同形語がある派生語の正答率が有意に高かったこと、用いる接尾辞が日中両言語で異なる場合に中国語と同じ接尾辞を選択するという誤用が目立つこと、逆に日中両言語で接尾辞の持つ意味が似ている場合には同形語でなくても高い正答率であったことから、派生語の理解に中国人日本語学習者の母語の語彙知識及び接尾辞が持つ意味の知識が影響していることが明らかになった。

また、中国人日本語学習者の場合、派生語の理解に日本語能力はごく限定的にしか影響していなかったことも、母語の影響の強さを裏付けるものである。実際、中国語と日本語の漢字の書字的類似性の影響は強く、英語母語話者と比べて、漢字の理解においてきわめて有利であることが証明されている。玉岡（1997）ではカナダの大学で日本語学習歴が1年から2年の中国語母語話者10名と英語母語話者17名について、漢字表記と仮名表記の語彙処理を比較している。その結果、中国語母語話者は漢字二字の語彙の視覚的な処理（語彙性判断）が英語母語話者に比べて迅速であった。さらに、玉岡（2000）では、オーストラリアの大学で日本語を学習し、学習期間が2年から3年の英語母語話者13名と中国語母語話者15名に対して日本語の音韻処理における母語の表記形態の影響について調べている。それによると、やはり漢字を母語の表記形態とする中国語母語話者は漢字表記の語彙の発音が迅速かつ正確で、仮名・漢字表記のテキストの読みも迅速かつ正確であった。以上のように、外国語（第二言語）としての語彙の習得の観点から考えると、母語の書字の共有性の高さが日本語の習熟度を上回る影響を及ぼしたという点で、中国語母語話者ならではの結果だと考えられる。

さらに、本研究の結果において、樹形図の中で日本語の習熟度に有意な違いが見られたのは、中国語に同形語がない接尾辞「員」の正答率のみであった。この結果から、派生語の理解に母語の影響が強く見られるというだけでなく、ある程度の日本語能力が身についても、派生語の理解は進み難い側面があると考えられる。これは、日中両言語の接尾辞に明確な対応関係がないことが関係しているであろう。語基だけではなく、1つの派生語として日本語で触れていれば正しい接尾辞を選ぶことができるであろうが、語基が難しい場合には、語基自体が（中国語では既知語であっても）日本語では未知語であったため、語基からは正しい接尾辞を選択することは難しかったと考えられる。その他に、中国語における使用頻度の影響も考えられる。日中同形語とはいえ、日中両言語で同じような使用頻度・親密度であるとは言えない。語の使用頻度や親密度が語彙の判断に与える影響は既に先行研究（近藤・天野、1999）で指摘されているが、本研究の場合、中国語での使用頻度や親密度が著しく低い場合、実質的に

は母語の知識を援用することが難しい語があった可能性もある。本研究では、日中同形語について、中国語における使用頻度および親密度を考慮した刺激語選択は行っていない。中国語の使用頻度を考慮した分析は、今後の課題としたい。

注

- 1) 本研究の結果では、ノード0からノード17からなる樹形図が描かれたが、紙幅の都合上、図1でノード2から伸びる樹形図のみを示した。従って、ノード0「接尾辞の正誤」及びノード1の「中国語における同形語あり」から伸びるノード3～4、9～13は省略した。

参考文献

- 沖森卓也・木村義之・田中牧郎・陳力衛・前田直子（2011）『図解日本の語彙』三省堂
- 加藤稔人（2005）「中国語母語話者による日本語の漢語習得 — 他言語話者との習得過程の違い」『日本語教育』125, 96-105
- 河住有希子（2005）「中国人学習者の漢字語彙使用に見られる問題点」『早稲田大学日本語教育研究』7, 53-65
- 国際交流基金・日本国際教育協会（2002）『日本語能力試験出題基準<改訂版>』凡人社
- 小森和子・三國純子・近藤安月子（2004）「文章理解を促進する語彙知識の量的側面 — 既知語率の閾値探索の試み —」『日本語教育』120, 83-92
- 近藤公久・天野成昭（1999）「文字単語および音声単語の語彙判断に対する親密度の影響」『日本心理学会第63回大会論文集』464
- 杉村博文（1986）「-者 -家」『日本語学』5(3), 92-96
- 玉岡賀津雄（1997）「中国語と英語を母語とする日本語学習者の漢字および仮名表記語彙の処理方略」『言語文化研究』17(1), 65-77
- 玉岡賀津雄（2000）「中国語系および英語系日本語学習者の母語の表記形態が日本語の音韻処理に及ぼす影響」『読書科学』44(3), 83-94
- 玉岡賀津雄（2006）「決定木分析によるコーパス研究の可能性: 副詞と共起する接続助詞「から」「ので」「のに」の文中・文末表現を例に」『自然言語処理』13(2), 169-179
- 玉岡賀津雄・初相娟（2013）「中国人日本語学習者の語彙的複合動詞の習得に影響する要因」(影山太郎 編)『複合動詞研究の最先端 - 謎の解明に向けて』(pp. 413-430), ひつじ書房
- 中国社会科学院語言研究所詞典編輯室（編）（2005）『現代漢語詞典（第5版）』商務印書館
- 陳毓敏（2009）「中国語母語学習者の日本語の漢字語習得研究のための新たな枠組み

- の提案 — 意味使用の一般性と意味推測可能性を考慮して — 『日本語科学』 25, 105-117
- 三喜田光次 (2000) 『ここが違う 中国語語彙と日本語語彙』 天理大学出版部
- 大和祐子・玉岡賀津雄 (2009) 「中国人日本語学習者の日本語漢字語の処理における母語の影響」 『ことばの科学』 22, 117-135
- 大和祐子・玉岡賀津雄・初相娟 (2013) 「中国人日本語学習者のテキストのオンライン読みにおける語彙と文法能力の影響」 『日本教科教育学会誌』 36 (1), 33-43
- 大和祐子・玉岡賀津雄 (2013) 「中国語母語話者と韓国語母語話者の日本語テキストの読み処理における言語的類似性の影響」 『小出記念日本語教育論文集』 21, 61-73
- 唐向红 (2009) 「中日词汇中表示“人”的接尾词的异同」 『日语知识』 2009.1, 29-30